

# 本を選ぶ

## 高校図書館版

NO.63 2017年(平成29年)5月20日  
<http://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス  
〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

### 高校生に薦めたい噺家の本

落語ブームだそうです。漫画から火がついて、寄席や各地落語会が大盛況。若いお客様も増えているとのこと。TVや雑誌、各種メディアでも取り上げられ、落語を目にしない日はありません。

落語は、聴くのが一番。しかし、読むのも楽しいですね。多くの落語関係の出版物から、今回は噺家さんが書いたものをご紹介します。毎日、大勢のお客様を楽しませている噺家さんの本は、落語未体験の人にも、必ずや心を潤すなにかを与えてくれることと思います。

一冊目は、人間国宝、十代目柳家小三治師匠の『ま・く・ら』(講談社/1998)です。「まくら」とは、お噺の最初につける雑談のようなお喋りのこと。この「まくら」で、噺家さんは、これから話すお噺を決めたり、会場の雰囲気を作ったりします。この本は、著者が、実際、高座で話した「まくら」をまとめたもの。師匠の借りている駐車場に知らない男が住み着いてしまった話、50歳のとき「アイ・ウオント・トゥ・スタディ・イングリッシュ」でアメリカの語学学校に突撃入学した話など、の珍事件のほか、日常の何気ない風景や噺家さん特有の旅のことなど、話題は豊富。思わず笑ってしまったり、ほろりとさせられたり。話術のブロらしい物語の展開で、その世界にどんどん引き

込まれてしまいます。しかし、この本の本当の魅力は、著者の温かな視線と深い洞察力をもった観察眼の鋭さです。また、既成概念にとらわれない発想の豊かさで、日常は、新鮮な驚きに満ちていることに気付かされます。

この優しさとユーモアの世界にもっと浸りたい方には、『もひとつ ま・く・ら』(講談社/2001)もいかがでしょう。こちらには、寄席の楽屋での事件や地方で出会った女の子との思い出など、ほろ苦いエピソードも。もう一冊、同著者で『バ・イ・ク』(講談社/2005)もご紹介いたしましょう。40歳を過ぎて、突然、乗ってみたオートバイのこと、仲間とのツーリング、旅先での愉快なお話の数々にワクワク必至。人間同士のつながり、自然とのつながりの素敵さを改めて思い、読書後の余韻が心地よい本です。

落語に興味をもたれた方には、柳家小満ん師匠の『べけんや』(河出書房新社/2005)をお薦めします。昭和の名人、八代目桂文楽に弟子入りをした著者からみた師匠の姿が、切れの好い端正な文章で描き出されています。「品があって、美しく、神々しい」と著者が熱烈に一目惚れした文楽。至高の芸に生きた人の高座に対する深い気持ちや生活へのこだわりは、興味深いもの。「べけんや」とは、文楽の困ったときの相槌で、意味のない言葉だそうです。噺家さんらしいですね。

これらは、落語の道を究めた生き方に触れる本たちです。世界は温かで、美しい。高校生にも社会人の方々にも楽しんでいただけたらと思います。

(山口由美:NPO アートとつながる鎌倉)

# 若いときに面白い本に出会ってほしい

—7号になった「BOOKMARK」—

金原 瑞人

2015年9月、「BOOKMARK」という冊子の1号を発刊しました。海外作品の紹介冊子で、ターゲットは中高生および大学生。つまり若者です。

表紙も裏表紙も入れて全24ページ。毎号、巻頭のエッセイはゲストに依頼し、別途16作品を紹介。紹介文はすべて訳者の方々にお願しました。

1号は5000部、2号以降は6000部作っています。全国の公共図書館1650館に送っています。また大きな書店さんから小さな書店さん



まで、児童書の本屋さんからカフェまで、現在、50以上のお店で並べていただいています。新しい号が出るたびにコーナーを作って、紹介している本を並べてくださる書店さんもあります。

現在7号まで出ていて、内容は以下の通りです。

1号「これがお勧め、いま最強の17冊」(巻頭エッセイ、江國香織)

2号「本に感動、映画に感激」(巻頭エッセイ、ひこ・田中)

3号「まだファンタジー？ ううん、もっとファンタジー」(巻頭エッセイ、松岡佑子)

4号「えっ、英語圏の本が1冊もない!？」(巻頭エッセイ、東山彰良)

5号「過去の物語が未来を語る」(巻頭エッセイ、深緑野分)

6号「明日が語る今日の物語」(巻頭エッセイ、星野智幸)

7号「眠れない夜へ、ようこそ」(巻頭エッセイ、恒川光太郎)

それぞれ、①一押し青春小説、②映画も面白い翻訳青春小説、③ファンタジー、④英語圏以外の翻訳物、⑤歴史小説、⑥SF、⑦ホラー・ミステ

リの特集です。

ちなみに、次は、

8号「やっぱり( )訳! 【①翻 ②超 ③言 ④名】どれもはずれです」

これは2017年6月発行の予定。テーマは出題のお楽しみ。

なんで、若者向けの翻訳小説の紹介冊子を作っているのかというと、じつはぼく自身、本を読み始めたのが中学校だったからです。小学校の頃は

あまり読まなかったのが、中学校でいきなり本の世界に飛びこんでしまって、高校大学と、そのノリで突っ走り、ついでに大学院にまで進んで、いま大学で英語を教えながら翻訳をやっているという次第。

とくに翻訳物が好きでした。中学の頃はいきなり、SF、ミステリにはまって、ついでに家にあった筑摩書房の世界文学大系と河出書房のグリーン版世界文学全集の面白そうなものをピックアップして読んでいました。どちらも字が小さく、前者は3段組(いまではあり得ない)、後者は2段組でした。そして高校の頃は、ずいぶんマニアックなジャンルに傾倒して、澁澤龍彦、生田耕作からサド、パタイユ、マンディアルグなどを読みあさるようになり、しっかり女の子に嫌われたのはいい思い出です。そして浪人時代、東京にきてからは、そういう傾向にさらに拍車がかかり、結局、医学部をあきらめて、私立文系に進むことになってしまいました。

さて、それはともかく、70年代、アメリカ書館協議会(ALA)で、「成人以降も読書をしている人は、いつ、その習慣がついたのか」というアンケートをとったところ、「中高生のとき」という

回答が圧倒的に多かった、それなのに図書館には児童室と一般室だけで、中高生のいく場所がない、そこからヤングアダルトむけの部屋やコーナーを作ろうという運動が広がった……というエピソードはよく耳にします。そのときのアンケートそのものをみたことがないので、真偽のほどはわかりませんが、ぼくの場合は、まさにそうでした。

そういえば80年代、ぼくが翻訳を始めて、朝日新聞に「ヤングアダルト招待席」という書評コーナーを3年ほど続けたときもまだ、ヤングアダルトというジャンルは、日本ではほとんど見向きもされませんでした。ところが、21世紀になったころから次第に注目を集めるようになりました。



しかし一方で、日本の場合、小学生の頃には本をよく読んでいた子どもが、中学生になるといきなり読まなくなる、とくに外国の作品から足が遠のいてしまうという話をよくきくようになりました。それはもったいないなと思い、10年以上前から、中高大学生のためのブックガイドを作り始めました。

ひとつはすばる舎から出ている金原監修のシリーズ、『12歳からの読書案内』（2005年）、『12歳からの読書案内 海外作品』（2006年）、『とれたて！ ベストセレクション 12歳からの読書案内』（2009年）、『12歳からの読書案内 多感な時期に読みたい100冊』（2017年）です。もうひとつはポプラ社から出ている『10代のためのYAブックガイド150!』。こちらは、ひこ・田中さんと監修していて、今年、続刊が出る予定です。2年おきに出していこうということになっています。それからもうひとつ、やはり、ひこ・田中さんとの監修で、来年あたりに、西村書店からヤングアダルトのための絵本ブックガイドを出す予定です。

若いときに面白い本に出ってほしいという、ただそれだけの気持ちからこんな活動をしている

のですが、とくに最近、読書の必要性を感じるようになってきました。

『12歳からの読書案内 多感な時期に読みたい100冊』の前書きにも書いたのですが、2001年、アメリカで9.11があり、その後、イラク戦争があり、アフガニスタン紛争が勃発し、テロが頻発し、ヨーロッパだけでなく、多くの国で右傾化が進み……と、21世紀になって世界はいやな方向に進んでいて、日本もそういう流れに飲みこまれてつあります。そんななか、タリバンの銃弾に倒れたマララ・ユスフザイさんが一命をとりとめ、ノーベル平和賞を受賞したニュースに感動した人は少なくないはず



がわいてきます。

理想の世界を想像し、また、痛めつけられ、虐げられた人の気持ちや、怒り悲しむ人の気持ちを想像すること。いま最も

必要なのはこれではないでしょうか。

想像すること、それを本は教えてくれます。というか、想像するところから読書は始まります。

とまあ、そんなこともあり、「BOOKMARK」を出すことにしました。共同編集者はぼくと同じようにヤングアダルト小説が大好きで、ヤングアダルト小説の翻訳をしながらヤングアダルトむけの本の書評を書いている三辺律子さん。イラストとデザインはオザワミカさんをお願いしました。図書館や書店への配送はライブラリー・アド・サービスさんが、校閲は女性翻訳家3名が手伝ってくださっています。

協力者に支えられた、自分勝手な冊子ではあるのですが、自分たちが本当におもしろいと思っている翻訳小説をなるべく多くの人に、とくに今の中高生に読んでほしいという願いは強く、できるだけ長く続けていきたいと考えています。

(かねはら みずひと：法政大学教授・翻訳家)

\*個人読者はウェブサイトから最新号を入手できます。バックナンバーは、やはりサイトからダウンロードが可能です。→<http://www.kanehara.jp/bookmark/>

## ミシマ社の「わたしたちの本づくり」

— 『THE BOOKS green』 365 人の本屋さんが中高生に心から推す「この一冊」— の制作エピソードを中心に、編集の星野友里さんにお話をうかがいました。—

### 『THE BOOKS green』が生まれるまで

『THE BOOKS green』は、2012年に発行した『THE BOOKS』の第2弾という企画で、2015年に発行しました。どちらも、本をよく知る365人の書店員さんにお薦めの「この一冊」を手書きのキャッチコピーつきで紹介いただいたものです。

多くの出版社が取次を通して本を配本しているのに対し、弊社は書店と直取引で本を卸しています。新刊が出る際はおつきあいのある書店に個別に案内をするなど、コミュニケーションが密になる中で、WEBマガジン「みんなのミシマガジン」の「今日の一冊」のコーナーで書店員さんに本を紹介いただいたのがはじまりでした。そこでの記事をまとめて本にしようという話が出た際に、せっかくだからたくさんの方に書いていただこうと、一年365日分日替わりで365人の本屋さんに本を紹介いただくスタイルに決まったのです。いざ書店さんから紹介文や直筆のキャッチコピー原稿が集まりだしたら、あまりの多さに収集が追い付かず、編集作業は大変でしたが！

でもそうして出来た『THE BOOKS』には、とても嬉しい反響がありました。この本は、ブックガイドであると同時に書店ガイドでもあり、全国の365軒の本屋さんについての情報や実際にその店を訪れた営業スタッフのコメントも掲載しています。紹介文や紹介本に共感された読者の方がその書店員さんをお店に訪ね、この本にサインをもらったとか、高校の先生がこの本に紹介されている本の著者を学校に招いて授業をされたとか、広がっていく話を聞くことができました。

### 若い人たちに本を

そんな中、第2弾をぜひ！とのお声をたくさんいただき、社内でも制作作業は大変だったけれどもっと紹介したい本や書店さんがある！という意気が上がる中、だったら今度は若い人たちに向けた本を作

りたいねとメンバー全員の思いが一致しました。弊社には本好きの人間が揃っていて、本に魅せられた経験もそれぞれにあり、今の中高生にも本を読んで「一冊の本で人生が変わる」というような体験をしてもらいたい！とかねてより思っていたのです。昨今、若い人たちが本を読まないといくと言われていますが、本を届ける側の私たちにまだ出来ることはあるという思いもありました。

新たに365軒の本屋さんに、本の紹介文をお願いしました。「中高生に心からお薦めしたい、絶版になっていない本を」というお願いのほかは何も指定しませんでしたので、実にさまざまな思いのこもった推薦文が届きました。「中高生にこの本を?!」などと一つひとつに喜んだり驚いたりしながらの制作は、とても面白かったです。本についてのやりとりを通して、書店さんたちともさらに打ち解けて親密になることができました。

### 本へつながるドアを増やしたい

この本の中で出来るだけたくさんの本につながって欲しいとの願いから、さまざまなことにこだわりました。紹介いただいた365冊全部の表紙写真を掲載し、装丁家の名前を載せたこともそのひとつです。自分の好きな装丁家さんが装丁した本を追求して読んでいくのも嬉しい読み方かなと思います。

メインの本の紹介の下に小さく載せた「次の一冊」欄も、ある書店員さんが紹介していた本を読んで面白かったら、じゃあこの人が紹介しているもう1冊も読んでみようかと、読書が広がっていくことを期待したものです。メインの「この一冊」は、重複しないようにしましたが、「次の一冊」はメインの365冊と重なっているものもあり、この書店員さんとこの書店員さんが同じ本を紹介している…などと気づいてもらえたら面白いと思います。

さらに、索引も本のタイトルだけでなく、著者の索引も作りました。興味を持った作家のほかの作品



「THE BOOKS」と手作りの「ミシマくん」人形

もこの本に紹介されている…と気づいてもらい、この本の中でも本との出会いを深めてもらいたいという仕掛けです。

実は、初版の際に索引にミスがあり、ある学校の司書さんから、「うちの生徒に『THE BOOKS green』を愛読・熟読している子がいて、“この本の索引のここが違うと思う”と嬉しそうに教えてくれたのですよ」と連絡をいただいたのです。索引のひとつのミスに気付くくらい読み込んでいただいたことにびっくりすると同時に、隅々まで読んで楽しんでもらいたいという私たちの思いが伝わったようで嬉しかったです。

### 本を作って、読者に届けるということ

編集と営業のほかに、「仕掛け屋」というチームがいるのが弊社の特色かもしれません。少人数の会社ですので、それぞれが担当を超えて仕事を共有していますが、著者のエネルギーを本にするのが編集、その本を書店さんに届けるのが営業、その書店さんから読者の方へ本が届くように趣向を凝らしたり、読者と著者がつながる機会を作ったり、全体を循環させる役目が「仕掛け屋」なのです。

「読者はがき」には、すべてお返事を書いているのですが、それを担当しているのも「仕掛け屋」です。感想を書いてわざわざ切手を貼って送ってくださるって、すごいことですね。著者の方々にはもちろん、「デザインがよかった」などとコメントがあればデザイナーさんに、「〇〇書店で購入した」とあればその書店さんにはがきをお見せして、嬉しい気持ちを共有しています。

若い人たちに向けて、本へつながるドアをいろいろ増やしたいという思いがあります。高校の図書館においては、司書さんがこの本を届けたいと思ってくださるかどうかで、高校生に本が届くかが変わってくると思いますし、司書のみなさん自身が本への入り口となる存在だと思います。

図書館の現場にいるみなさんに、若い人たちに一緒に本を届けていきたいと思います！

——昨年10月に創業10周年を迎えられたミシマ社。東京と京都の2ヶ所で、10名の方たちが丁寧に本づくりを続けていらっしゃいます。自由が丘の古めかしい一軒家の社屋では、丸いちゃぶ台を囲んで会議をされたり昼食を食べたりされるとのことでした。和気あいあいとした雰囲気の中で、本が生まれてくるのですね。

しなやかな感性で本づくりの世界に新風を吹き込んでいらっしゃるミシマ社さんの今後のますます楽しみです。星野さん、ありがとうございます。(LAS探検隊)——

※星野さんに高校生にオススメのミシマ社の本を5点選んでいただきました。ぜひお読みになってください。

内田樹『街場の教育論』／近藤雄生『遊牧夫婦』

尾原史和『逆行』／青山裕企『(彼女)の撮り方』

後藤正文『何度でもオールライトと歌え』